

## 抑留記

福井県 石田 照夫

### 出生、入隊

大正十一（一九二二）年九月九日、福井県今立郡岡本村大滝（現在、今立町大滝）で出生。

昭和十（一九三五）年三月、岡本小学校尋常科卒業。

母子家庭であったので、卒業と同時に近くの越前和紙製造工場に就職。そのころは青年学校という夜学があつて、そこで学科と軍事教練を学びました。

昭和十七年徴兵検査で第一乙合格。

昭和十八年四月五日、家族はなく一人だったので留守番のために結婚をしました。

昭和十八年四月二十日、臨時召集により京都市伏見区深草中部四〇部隊（野砲隊）に入隊。

昭和十九年九月、独立歩兵第四一九大隊野砲隊に転属となり、千島択捉島に上陸した。

兵舎がなく幕舎で生活して半地下式。三角兵舎を造って入居した。千島では交戦や空襲などは一回もなく、大砲や小銃などは一回も使用しなかった。

毎日陣地構築や道路工事で、その合間に物資の揚陸作業があつた。択捉には今後一万人くらい兵隊が来る予定なので、その人数分の食料、被服、燃料の石炭から、タバコ、甘味品に至るまで一年分の物資が毎日船で送られて来た。米などは入れる倉庫がなくて、皆野積みであつた。内地で物が不足していたのも当然のことと思つた。

陣地も初めのうちは水際陣地を造っていたが、南方の島がそれで防御できずに玉碎したので、これではいかんということでも山の中に陣地を造るようになって、それから山の中に入って作業した。大体でき上がったところで終戦となる。

昭勅は、隊長が大隊本部に集合命令があつて、

そこで知らされたのだと思う。

そのころ我々兵隊は、山中にできた陣地に大砲を収納するために山道をロープで全員が引っ張って運搬の途中であったが、戦争は済んだと聞かされ、大砲はそのまま山中に投げ捨てて下山して兵舎に戻った。

海軍の暁部隊が一小隊ほどいましたが、彼らは舟艇があったのですぐに島を出て行ったと聞いたが、どこへ行ったか行き先は分からない。

我々陸軍は舟がないので帰るに帰れず、中隊の倉庫にあった多くの物資を全員で山分けをした。米、毛布からタバコ、缶詰、甘味品など持ちきれないほどもらって、毎日腹いっぱい食べていたが、一週間くらいしてソ連軍が侵攻してきて、武装解除をして兵舎に閉じ込められて自由がきかなくなつた。その後たびたびの私物検査をやって、身に付けている眼鏡、時計、万年筆、鉛筆、小刀、革バンド、シガレットケースなど目ぼしい物はすべて没収されてしまった。戦勝国の兵隊はこ

のような品物は誰も持っていない。タバコすらなかった。

その後しばらくして小樽へ連れて帰ると言うので、背中に毛布や米、タバコなど担がれるだけ担ぎ飛行場へ連れて行かれた。

船に乗るようになると持ち物があれこれと制限されてしまった。皆帰りたい一心でソ側の言う通りにして、背中に背負った大きな荷物も船に乗ったときには雑囊一つになっていた。

飛行場には我々の捨てた米や毛布、タバコその他いろいろな物が山になって残つたが、それが全部ソ連の物になってしまったことと思う。

一度途中で樺太大泊港に寄港、その後二時間くらい南下していたが、そのうちに北進に変わった。幸いにコンパスを持っていた人がいて、北に向かっていることが分かったのである。着いた所は沿海州地方のポルトワニノという港だった。昭和二十年九月末日であった。

## 抑留回想

船が停まって甲板に出てみたら風はひんやり冷たく、建物の屋根にローマ字が書いてあるのを見て、予想したとおりここは日本ではない、ソ連だ。これではもう日本には帰れないと思った。ワニノに上陸して貨車に乗せられた。そのときに米が支給されたのでそれを飯盒で炊いた、二日ぶりに飯にありついたことになる。

二日ほど走ったところでラーゲルに着いた。

シベリアは昔の流刑地で囚人の収容所が所々に建てられていて、その一棟が我々の生活場所のラーゲルである。出入り口以外は二重に有刺鉄線を張り巡らし、四隅には望楼が建てられ、二十四時間監視兵が見張っていた。逃げたところで食物はなし、防寒具もなく死ぬのが落ちなので、ソ連兵の言いなりになるよりほかに手はなかった。

強制労働をいろいろやらされた。道路工事、ピルス工事（波止場）、鉄道レールのレモントバラスの運搬。そのころのシベリアの鉄道は薪で走っ

ていた。汽車の薪切りもその一つである。太さ十センチから十五センチくらいの立木を切り倒して、長さ一メートルに切り、二つか三つに割り線路の近くに積んでおくと、薪のなくなった汽車がそれを積んでまた走って行く。ノルマは一人一方メートル。鋸は長さ一メートルくらいで両方に握るところがあり、二人で引くので慣れないと難しい。

生活で一番の苦勞は水がないことで、必要な水は飯盒や水筒などを持って川まで汲みに行った。朝はコップ一杯で口をすすぎ、顔を洗った。風呂は洗面器に一杯湯をくれるので、それで体を拭いたり洗ったりしていた。水汲みは大変きつい仕事であった。一週間に一回の風呂だから不潔になりシラミが湧いた。シャツの縫い目には卵がぎっしり付いていた。暇なときはそれを爪で潰すのが仕事であったが、それも入浴のたびの煮沸消毒や熱処理によってそのうちに全滅した。南京虫も昼は木材の割れ目や壁の切れ目の中に隠れ、暗くなる

と出てきて人間を刺しに来る。食われると痒いが二、三カ月すれば免疫になって気にならなくなる。

そのころ、誰が作ったのか知らないが歌ったことがあったので、思い出しながら述べてみる、一カ所忘れたところがあります。

#### 抑留数え唄

一ツトセー人を騙してはるばるとイイエー

連れて来られたシベリアよ

小樽の港はまだかいなエ

二ツトセー二言目にはノルマだエ

苦勞しました汽車の薪

二人で引く鋸染じやないぞエー

三ツトセー三日四日と糠ばかりで

足はふらつく目はくらむ

部隊の半数は下痢患者だエー

#### 四ツ (忘却)

五ツトセーいつも出て来るお話はイイエー

#### 何月何日のダモイ説

いつのいつかがほんまだエー

六ツトセー昔話の正月はイイエー

#### お屠蘇機嫌の雑煮餅

今じゃ黒パン坊主汁じゃわいー

七ツトセー七度有つてよい物はイイエー

#### 終戦当時の給与かなー

毎日あれほど喰わさんかエー

八ツトセーヤポンスキーはまだかいなー

#### 黒パン十五食受け取つて

スカレ、ダモイは半島人かエー

九ツトセーここですつまでラボトだいエー

#### アジン、ドヴァーの再検査

ダワイダワイも聞き飽きたぞエー

十トカセイエー遠の昔にできました

#### ダモイ準備の気の早さ

雑嚢一ツで完チャイだエー

## ダモイ（帰還）

昭和二十三年七月末にダモイの通達があり、ワニノに集結した。貨車の中は前後が二段に仕切られ、毛布が人数分あった。これがベッドである。筒が一本貨車の外に出ているのが小便用のトイレである。

貨車一両で四十人くらいの乗員だったと思う。途中停車したコムソモリスクには立派なスタンチー（駅）が建っていた。アムール川の近くには夕方着いた。夜は貨車から外へは出ないように通達があった。我々は気がつかなかったが、夜のうちに貨車はそのまま船に乗り朝には対岸に渡っていた。

ナホトカまでどれくらいかかったのかは、はっきり覚えていないが、三、四日くらいかなと思っている。船は「山澄丸」でした。乗船して、これで本当に日本に帰れるんだと思った。思えば生家を出て軍隊二年、捕虜三年、計五年の歳月が流れていた。

長い間の苦勞であったが、お陰様で生きて帰れたことをありがたく思い、これから先の余生を大切に元気で暮らしていこうと思っています。

## 【執筆者の紹介】

今年提出の「抑留生活」の記録をお願いしました。快くお引受け下さったのですが、もう六十年も経っているので覚えていないとのことわりもありましたが、何とか答えが来ましたので紹介できました。

私の町の抑留会支部結成ができた協力者で、各戸を走り回っていただき、成立を見たのです。

長い付き合いで、会うたび、選挙どきは何の答えも出ぬ、議員立法云々でいつも大笑いしている仲です。

町でも今立町の和紙製造（日本紙幣）では抜群の成績で、評判の良い方です。

（福井県 佐々木 清左夫）